

〈研究ノート〉

柳原白蓮における恋および恋歌

中西 洋子

はじめに

二〇二四年十二月八日、「鎌倉漱石の会」（事務局菅佐原智治氏、以下「漱石の会」）に招かれて「柳原白蓮の恋」と題する講演の機会を得た。白蓮（本名燐子一八八五―一九七一年）の波乱に満ちた八十一年の人生をふり返ると、それは少なからぬ恋愛体験とともにあったことが、特に前半の歌集によって確認できる。

しかし、白蓮一人に限ったことではないが、一概に恋愛体験といえどもけして一筋縄ではない複雑な様相を呈しており、それに伴う恋歌（以下の読み同）をどのように理解すればよいか困難な状態である。体験自体と恋歌そのものが一致するとは限らない場合も当然考えられよう。

先の「漱石の会」では白蓮の経歴に沿って、I 出発

期の恋、Ⅱ伊藤伝右門と再婚後の恋、Ⅲ宮崎龍介との恋、と分類し、それに相当する作品を提示して成立事情を背景に解説と鑑賞を加えた。この内ⅠとⅢは相手の存在する恋、Ⅱは相手是谁か不特定多数の恋であり、何ともとらえ難く難解な部分である。その後、白蓮の恋及び恋歌の背後にはもつと根源的な問題が潜んでいるのではないか。それも動員しなければ充分な理解が得られないのではないか、と考えるに至った。

その手はじめに本稿では、白蓮にとって恋とは、恋を詠うとはどのような存在であったのかを念頭におきながら、改めて恋及び恋歌の持つ意味を考えてみようとするものである。

一

A 夢かあらぬ現（うつつ）かあらぬ遠方（をちかた）の雲のあなたに我名呼びます

怖ろしき毒矢逃れてそゞろにも涙こぼる、此

（この）夕べかな

御姿もみ声も聞かぬ此住家（このすみか）千里のをち（彼方）といづれが遠き

憎き人の悲しきうはさ（噂）ふと聞（き）て我にもわかぬ涙流る、

悲しかれいよ、辛かれ天地（あめつち）の運命（さだめ）呪ひて命果つべく（○内は筆者補筆）

右は「心の花」第十四卷第八号（明四三・八）所収の、柳原燐子署名による作品掲載の初見である。その二ヶ月後の同卷第十号には同じく本名で四首が見える。

B いまこそはあれ我が死なむ日は秋の野の花の如くにならんねがひ

昔見しやうなる雲はうつゝ、なの思ひをのせて何所（いづく）にかゆく

ふと思ふ真白き馬に鞭うちて弱きよ（世）の人ひれふ（伏）さしめば

生くべきか死すべくかはた生まれこし二十の我身何をかすべき

この頃燐子は明治三十八（一九〇五）年北小路資武との離婚によって実家にもどり、義母初子の隠居所に

における軟禁状態の期間を経て、同四十一年東洋英和女学校に入学し、寄宿舎生活を送りながらキリスト教精神に基づく教育を受け始めた時期であった。後に翻訳家・児童文学者となる親友村岡花子を得て、燐子には楽しく充実した学生生活であったと懐古している。花子とともに佐佐木信綱の「竹柏会」に入会したのも同時期であった。A第八号の作品は同人短歌欄「青風白雨」、B第十号も同短歌欄「八千草」にそれぞれ題名なし作者名のみとして掲載されており、言わば初心者欄だったとみなされよう。

A第八号五首全体から受ける印象は悲観的で暗く、また多く過去への思いに目が向けられている。特に一首目と五首目にそれが顕著であろう。しかし一方注目すべきは一、三、四首目に見られる相手を想定した恋情発想の歌である。夢なのか現実なのか区別がつかないけれど、遙か彼方の雲の向こうから私を呼ぶ声が聞こえる……。あなたのお姿もお声も聞くことのできぬこの住まいと、千里の彼方とどちらが遠いのでしょうか……。

あの憎らしい（ほど恋しい）人の知りたくもない噂ば

なしを聞くと、自分でもわからない涙がこぼれてくる……。こうした歌からはあながち悲観的で暗いとはかりは言い難い、どこか救いを求めるような切実な恋心が感じられる。

続く後者B第十号四首では、一首目の傍線「我が死なむ日は」、四首目の同じく「生くべきか死すべくか」に見るまでもなく、死を覚悟したような切迫した強い印象を受ける。その相手は一体誰だろうか。燐子が実家に戻っていた一時期、そして伊藤伝右衛門と再婚する以前、義母初子の甥に当たる青年が柳原家に寄寓していたことがあった。名は松根豊次郎（俳号東洋城、母は初子の妹敏子）。宇和島藩城代家老につながる古い家柄の出身である。東京帝国大学を経て京都帝国大学卒業後、宮内省に入省しようとする明治三十九（一九〇六）年前後であった。燐子の美しさは既に知られていたが、彼も人目を引くほどの美男子だったという。同じ屋敷内での日々、折につけ言葉を交わす機会のあったことは想像にかたくない。やがて二人の間に恋が芽生え、次第に真剣になっていったと思われる。この時期の東洋城に次のような句が残されている。

1 黛を濃うせよ草は芳しき

2 従姉妹なる女と春を惜しみけり

3 妻もたぬ我と定めぬ秋の暮

〔松根東洋城千句集〕現代俳句集成13卷所収〕

春うららかな草萌ゆる季節、黛^{まゆずみ}を濃くせよ、化粧せよと呼びかける女性。ゆく春を共に惜しむ従姉妹なる女性への親しさ。(一生)妻をもたないと決心した晩秋。このように詠ういづれもそれは他ならぬ燐子を指しているともみられよう。結婚を決意した二人であったが、彼は松根家の跡継ぎ(嫡男は幼少時に死亡)であり、伯爵家の血筋とはいえ一子をもうけた出戻り女性との結婚を両親が大反対したのであった。思いつめた二人は心中を決意するまでになり、ついに夏目漱石に胸中を打ち明けたのである。彼は松山中学時代に赴任中の漱石に教えを受けて以来、俳句を通じて親しく師事していた。その漱石からさっそく次のような葉書が届いた。以下は中川越『文豪通信』から引用する。^{註4}

C 漱石易断に曰く、全然無罪。安心安眠を可トス。

先方デ何トカ云ツタラ屁^へヲカマスベシ

その二日後の葉書には、

D 心中するも三十棒／心中せざるも三十棒

E 朝貌や惚れた女も二三日

要約すれば、Cは「全然無罪」、「屁をかますべし」など悪ふざけのようにみえるが、東洋城があまりに思いつめているので、肩の力を抜くようにとわざと軽口をたたいたと言い、Dでは、「三十棒」とは禪宗でいう警策の意。つまり、多くの厳しい警策によつて修行者を正しい道へ教え導くことであるが、心中してもしなくても厳しい教え(世間の非難)を受けるのであれば、心中などしない方がよいのではないかと漱石は言っている。

またEの句も、深刻になり過ぎてゐる東洋城には重苦しい警句は逆効果、あえて軽みをつけて明るく励ますことが漱石のねらいだった、というのである。この

葉書が功を奏して、結局心中を思い止まらせたのであった。しかし、よほど燐子に未練があつたらしく、先の3「妻もたぬ」の句に知られるように彼は終生独身で通した。^{註5}それにしても何とも洒脱で気の利いた漱石の葉書だったことか。

つまり、先に示した燐子の作は悲恋に終わった頃に詠われたものと考えられる。加えて、今まで相手は誰か不明であつたが、東洋城の1・3と少しばかり時間的なずれが認められるものの、まさしく歌と俳句は呼応していたのであつた。燐子にとっては最初の真剣な恋であり、恋の相手であつたのである。その頃福岡の炭鉱王・伊藤伝右衛門との再婚話が急速にまつまりつあつた。燐子は伝右衛門に嫁ぐ前、

初夏や白百合の香に抱かれてぬると思ひき若草の床

としたためた色紙を東洋城に渡している。「ぬる」は「寝る」の意、二人だけの甘やかな営みを詠った内容である。東洋城はこの色紙を生涯大切に保存していたとい

い、彼の姪が遺品の中に見つけたという。^{註6}この姪と燐子は親しく交流していたらしく、伝右衛門との再婚話を相談した書簡が残されていた。^{註7}

二

二十五歳年上の伊藤伝右衛門との再婚話は傾きつつある柳原家の財政立て直しのためであり、燐子の意志とは関わりなく進められていた。婚家は伝右衛門の多数の女性関係による腹違いの子女らとの同居という、複雑な家族構成に加えて、使用人をはじめ家の中のこと、伝右衛門の身の回りすべてを女中頭のおせきを取り仕切っており、妻であり主婦であるはずの燐子には何一つその権限が与えられていなかった。自伝的小説『荆棘の実』には、そうした場面が随所にみられる。^{註8}また、林真理子著『白蓮れんれん』にも次のように描かれた箇所がある。^{註9}

(前略) この私が使用人の前で、しかも夫の前で泣いていると思うと、燐子は気が遠くなりそうになる。けれどもその声を止めることが出来なかつ

た。(略)「サキをやめさせてください」それは出来んと伝右衛門は言う。その一点張りだ。最後は黙りこくる伝右衛門に、どうか離縁して欲しいと燐子は頭を下げた。

(サキはせきのこと)

おせきを恐れるあまり、燐子に同情しながらも味方をする女中はごくわずかであったから、伊藤家の中で孤立無援の状態であった。自分の意のままに振る舞うことを許されず、ただ人形のごとく美しく着飾り、おとなしく日々を過ごしている日々だったのである。

F 何物も持たぬものをば女とや此の身ひとつも我ものならぬ

ゆくにあらず帰るにあらず居るにあらず生ける
か我身死せるか此身
誰か知る鳴けよ唄へとあやさる、緋房の籠の美しき鳥

(「心の花」第15巻第6号)

「まぼろしの花」16首より。この時期の懊悩が如実

に表現された秀作である。再婚話の折の口約束では伝右衛門が出資した嘉穂郡立技芸女学校における教育の仕事や、東洋英和女学校在学中身につけた慈善事業に携わることができるといふ話もあつてなく潰えた。こうした束縛の多い環境にあつて燐子は何を心の支えに生きようとしたのか。それは作歌と写経に励むことであつた。作歌は、信綱の指導に従つて「心の花」誌上に掲載されるのを頼みとして励んだ。写経は、かつて伝右衛門との結納が執り行われようとする頃、柳原家に出入りして禍を除いたり、病気を癒やしたりする力を持つ法華經の行者の影響による。^{註10}

G 有難き御経おんぞとて示さるる白衣の人にすくせ
(宿世) 問はばや

今宵また御経写す静けさに邪執のかげも消えて
行くかな
壽量品うつしまつれば後の世にあはましものと
みあかしの影

『踏絵』にはこうした歌が散見する。写経、誦経に

没頭することがせめてもの心の拠り所であった。

一方、ひたぶるに作歌する燐子の努力は、先掲F「まぼろしの花」16首前後より実を結び始め、一九一五年（大4）三月第一歌集『踏絵』が出版される。著者名は「白蓮」。筆名を用いるのは「まぼろしの花」16首が初出であった（以後筆名を使用）。「心の花」叢書の一つであり、緒言にも明らかのように信綱の強力な推薦があったことはいまでもでもない。加えて「心の花」第十九巻第五号（一九一五年）では同歌集の批評特集を四十数ページ占め、執筆者十六人という力の入れようであった。出版費用（当時およそ600円）は総て伝右衛門の負担である。彼は普段白蓮に小遣いは持たせなかったが、このような場合は何も言わず支払ったという。自分の妻とその歌集が地元の文化人、記者など知識階級の人々の評判になったことへの、世俗的な誇らしさが大いに手伝っていたと思われる。

三

『踏絵』中には「心の花」掲載当初の作品は無論のこと、さらに様々な恋歌が詠い継がれている。燐子の

初期の恋は先述したように確かな相手の存在が認められるのであり、そこから生まれた恋歌であった。しかし飯塚時代の恋はかなり異なる。それは「女」であることへの強い抵抗感を前提としていることである。周知のように明治期から大正期にかけて、女性のおかれた社会的環境や既成概念には、旧道徳が根強く残っていた。

H罵りのしもと（答）もて打つ世の人よ知るや吾が名はをみなとしいふ

誰がために落とす涙ぞ誰がためにほほえむ吾ぞ女てふ名に

心憂きこと言はれても情けぞと笑みてあるべき女のすくせ（宿世）

女とはいとしがられて憎まれて妬まれてこそかひ（甲斐）もあるべし

女とは世とは道とはう（憂）きつらき生ける限りの謎にあらじか

「女」^{をみな}というのは宿命であり、世間の罵りやつらい

思いに我慢するもの、女とは、世間とは、道理とは、何だろう。みじめで情けないもの、束縛の多いもの、生きている限りの謎ではあるまいか——。こうした男尊女卑の世に生まれたことへの嘆き、憤懣やるかたない思いを詠った類例歌が少なくない。その源は「われ」を自覚するところから来ていた。

―月はめぐるこのわがふめる大地にわれてふもの
のありとし知るや

わが足は大地につきてはなれ得ぬその身もてな
ほあこがるる空

人の世の衆生歓喜の声よりも吾に足ること吾に
尊し

吾は強し怒りを胸にたたみつつ思ひなほしてそ
らゑみもする

『踏絵』の特徴の一つに多用される「われ」の歌の一例である。それは「心の花」批評特集の評言に否定的だったような、自己への強い執着と他の世界に転ずるまなざしの乏しさという、従来通りの受け取り方だ

けではなく、別の一面にも目を向けた歌があったことを見逃してはならない。私の存在は私が踏むこの果てしない大地にあり、その確かな自覚の上にこそ憧れ心が生まれる。世間の人々のどんな喜びよりも私は自身に満足できることを何より尊しとする。いわれのない嘲りや噂に激しい怒りを押し殺して、笑顔を作ることだつて出来る強い私なのだ……。強い自信と自尊心のみなごった歌である。批評特集に指摘された「われ」とは明らかに異なる部分であろう。

しかし一方では「何物も持たぬ此身の重荷ただ吾はわが身をいかにかすべき」、「火に怖ぢよ水におぢよと世の中の怖ろしさのみ習ひつる吾」、のような弱々しく不安定な存在としての「われ」の側面も見せる。つまり「われ」は強さと弱さを合わせ持った存在であるという自覚であった。

こうした自我意識はすでに与謝野鉄幹創刊の「明星」が浪漫主義を掲げ、「自我の詩」や「自我独創の詩」を提唱し、個性の尊重を呼びかけたことなどによりよく知られている。同時代を生きた白蓮の「われ」の意識もこの主張とけして無関係ではなく、多くの若者同

様強い刺激を受けた一人であつたと考えられよう。与謝野晶子を始め山川登美子、増田雅子らの活動を眩しく新鮮な思いで受け入れたに違いなかった。

飯塚における白蓮の恋は、相手があるのかないのか歌の上からはよくわからない。『踏絵』出版後、白蓮は次第に名を知られるようになり、その周囲には常に男性が取り巻き、手紙のやり取りなども盛んであった。陸軍中将藤井民助のような恋文まがいの熱烈なファンレターも多くなった。燦子はそうした相手との文通を楽しんでゐた。中でも世間では九州帝国大学教授で歌人の久保猪之吉（「心の花」同人）は世間の噂になるほどよく知られた相手であった。しかし相手も妻のある身である。どこまで本気であつただろうか。「エニグマ」^{註11}には猪之吉の恋歌のみられないのが残念である。

J 吾は知る百千の強き恋ゆゑに百千の敵（あた）は嬉しきものと

或時は王者の床も許さじとま（枕）きしかひな

（腕）のこの冷たさよ

美しう君に背くといふ事もいつか覚えし哀しき
誇

いくたりの浮かれ男の胆を取る魔女ともならむ
美しさあれ

百人の男の心破りなばこの悲しみも忘れはてむ
か

百千の恋を知る、王者の床も許さじ、美しう君に背く、浮かれ男の胆を取る魔女、百人の男の心を破るなどという、男に対する自信に満ちた誇り、矜持とその裏腹をなす寂しさ、悲しみ、やり切れなさ。相手は誰という特定の人ではなく、世の中の男総てに向けられた攻撃的な恋歌である。どれほど多くこうした類いの歌を詠おうとも、よりいつそう悲しみや寂しさから逃れようがない。自虐的でさえある。さらに詠う。

K わがために泣きます人
の世にあらば死なむと思ふ今の今いま

君なくばわが世もあらじ人もあらじまして身を

焼く思ひもあらじ

志(し)よざいなさありのすさびに君恋ふとい
はばやいかに魔なる女よ (「エニグマ」^{註11})
遙かなる君の恋ひしも大海の闇の奥より遠鳴す
れば

忘れむと君言ひまさばつらからむ忘れじといは
ばなほ悲しけむ

あひ見てはすねてもみたく分かれては泣きてあ
はれみ乞はむとも思ふ

頼みつる夢にもよべは會ひもせで置く霜白き冬
の明方

幼子のごとくに泣きてすねて見たや君にあはぬ
が悲しいひて

かの時のかの一言の忘れずば忘る期あらば戀よ
呪はむ

二十四時わかれて後のはるけさよ吾が生涯を待
つごとわびし

ペコニヤの花の眠ると君が来ます夕べのくると
いづれか早き (『踏絵』)

わたつ海の沖に火もゆる火の国に我あり誰そや
思はれ人は

遠くなりいよよ恋しく懐しし憎しと見ればいよ
よ忘れぬ

ふと今宵まことに人を恋ひぬべき純の心を尋ね
ていでぬ

破れやすき素焼きのごとき心よと見つめし眼さ
へ今に忘れず

胸そぞろ心もそぞろ手も足も何に追はるるもの
ともなしに (『幻の華』)

ここに登場する「君」はそれぞれ誰か、実在するの
かどうか、まるで知る術がない。ともかくこうして並
べてみると、およそ恋に関わるあらゆる情念が詠い尽
くされているように思う。初恋の胸の高鳴り、恋する
苦しき、懐かしき、恋するゆえの憎さ、妬ましき、相
手への媚態、甘え、過去の恋、片恋の思い、純なる心
への追求、逢えぬ悲しみ、苛立ち、陶酔感、居ても
立つても居られぬ焦燥感、などなどである。現代にも
そのまま通じる恋の諸相である。この内のどれ一つを
取ってみても、相手のあるなしに関わらず恋の思いの
つきつめた真剣さを受け取ることが出来るのではなか

ろうか。中には過去の恋人も含めて、特定の相手を意識した歌なども混じっていることは十分考えられるだろう。いずれにせよ真剣そのものの恋情であり歌の表現であったと思われる。

では白蓮にとって歌を、とりわけ恋歌を作る営為にはどのような意味があったのだろうか。

四

し筆をもて吾は歌はじわが魂と命をかけて歌生まむかも

誰にいひ誰に聞えむすべもなき涙の糧にわが歌は成る

底知れぬ心のなやみ呪ふべく歌を綴れり吾といふ歌

吾が思ひ炎のしづくここにこりて歌ともなれとせめて祈らむ

(『踏絵』)

私にとって歌は、魂と命をかけて作ろうとするもの。どうしようもない悲しみの涙を糧として生まれるもの。心の悩みを呪うべく綴るもの。炎のごとき思い

のしづくが凝りかたまつて歌となれとただ祈る、そのようなものだと詠う。つまり、魂と命をかけて、悲しみの涙を糧として、「心の悩みを呪うために」、炎のごとき思いのしづく、などから受ける印象は頑ななまでに真剣そのものといつてよい。歌とは何か、という突きつめた思いが読み手を圧倒せんばかりである。

このような歌に対する思いを理解した上で、改めて恋歌をながめてみると、たとえ一時的な慰めや遊び半分のつもりであっても、あるいは不特定多数の相手であったとしても、そこには押さえ難く真剣な恋心が自ずと頭をもたげていた、共存していたのではなかっただろうか。恋歌を作ることは歌を作ることそのものであったと言つてもよい。少なくとも『踏絵』『幻の華』の時期にあつては。何よりもそれは白蓮にとって必要不可欠の生きるエネルギーであり、古い慣習に束縛された息の詰まるような現実から逃避する唯一の手段でもあった。

M 幾人の口より口に伝はりて我目にも入るあやしき我名

我名をば誰か名ぞともいぶかしむ刹那の後の寂しき思ひ

摩訶不思議噂の生みし我といふ魔性の女いくたりか棲む

嘲りも痛罵も今はよろこびの声と聞くまで世なれ人なれ

いとまあれやさかしら人は木の葉吹く風のまにまに我門叩く

〔摩訶不思議〕10首より『幻の華』

しかし一方、白蓮はいつしか別の女を棲まわせていたことも確かであった。Mの五首は『幻の華』巻頭からの抄出である。『踏絵』によって広く名を知られる存在となったが、それだけに世間の風当たりもまた生半可なものではなかったようである。歌人にして世に希な美人、富豪の妻、文化人の日々集うあかがね御殿の女主人である。勢い恋の噂に関しては、あること無いこと口さがない人から人に伝わって、自分の目にも入るまでになった。それは自分の名でありながら自分の名ではない、何と怪しげなびきをもった名である

ことか——。魔性の女を棲まわせ、嘲笑や痛罵にひるむことのない極めてしたたかなもう一人の白蓮がここにはあった。私の名を誰の名だったかしらと、ふといぶかしんだ後の何とも言えぬ寂しさよ。とつぶやくような、弱気な面も持ちながら、自分が世間からどのような女に見られているかを、いたって冷静かつ客観的にとらえている点に注目したい。歌集としての『幻の華』は、白蓮の生き方と恋を豊かに育てた土壌であったともいえる。恋人のありなしにかかわらず作歌そのものにかかる情熱は少しも変わることはなかったのである。

五

Nあらざりし物語かとおもふほど薄れてゆきぬ初恋人は

身にそへる影は一つに足るものを二つ並ぶる罪のまぼろし

思ひ迫り運びし筆の許されぬ罪かのごとくうち嘆かるゝ

逢はまほし逢はむと応（いら）へ斯くてなほ許

さぬものゝあるこゝちする

見えぬほどうちふるふかな我胸と君がかたへの
シネリリヤの花

君とゆく音羽の町のたそがれに淡雪のちる如月
半ば

けふよりはまた逢うひまの別れぞというて暮ら
して何時までまたん

〔香の札百首〕初版本『几帳のかけ』^{註12}

小春日の暖かき浜に一人して君を思へり吾子を
おもへり

病む人よ此宵（こよひ）しつ（づ）かに夢にこ
よ波のとは音のまぼろしに来よ 〔紫の梅〕

伊藤家や伝右衛門とのさまざまな軋轢に苦しみながら、地元の人をはじめ文学仲間、知識人らとの交流を深める文学サロンを開き、「筑紫の女王」と呼ばれるまでに確かな地歩を築いた。また、歌人としての活動のみか戯曲などにも表現の場を広げていた。『指鬢外道』^{註13}はその代表作である。内容は仏典を素材とした、根強い封建制、取り分け男尊女卑への抗議であつた。

た。一九一八（大正七）年頃、九州帝国大学病院の久保猪之吉を頼って入院していた倉田百三との交流による影響といわれる。戯曲は東京帝国大学の黎明会機関誌『解放』に掲載され、やがて創作劇場で上演されることになる。それをきっかけとして宮崎龍介と出会い、文通のやり取りを重ねる間に二人の中が急速に深まっていた。

Nに掲げた最初の二首からは、初恋の人の面影が薄れ、我が身の傍らにもう一人寄り添う人が現れたと、白蓮の心に生じた変化が読みとれよう。続いての五首は、ある一人への恋の成就を神に祈って詠った「香の札」百首所収の内である。百首は伝統に従って精進齋を行った後、相手の寿命を言祝ぐ一首「大前に君が名呼びぬ千歳（せんざい）のいのち生くべき名よとまうして」から始まる。言祝ぐ対象である「君」は誰を指すのか。一首目は、どうにもならない恋心を押さえかねて手紙を書くとしたが、それは許されない罪のように思えるという内容。先掲二首目の「罪のまぼろし」にも通じる、人妻でありながら押さえ難い恋心を抱く罪の意識に注目したい。二首目も会うことをかた

く約束しながら、心のどこかに許されないものがあるように思える、とやはり払拭しきれぬ罪悪感に苦しむ内容である。三首目は少女のような初々しい恋心を、四首目は二人で音羽の町を歩く喜びを、五首目では次の逢瀬までの時間の長さへの嘆きを、さらに六、七首目では恋心の苦しさをそれぞれ詠う。

最後の二首は、出奔後姦通罪にも等しい二人に浴びせられる激しい非難、右翼団体からの脅迫、暴力団の執拗な嫌がらせなどを逃れて、身を潜める場所を転々とする日々が二年近く続く。この間、白蓮は男子（香織）を出産し龍介によって婚姻届も済ませている。二人との新生活がまだ始まらない時期、白蓮は京都綾部における大本の聖師出口王仁三郎^{おにさぶろう}に匿われて手厚く保護されていた。その頃の作である。一人で浜辺に出かける自由にも恵まれた。思いは自ずと離ればなれの幼子や龍介の上に及ぶ。胸を病む龍介に夢まぼろしにも願れよと願う。この二首には、近い将来実現する筈の「家族」という意識を内包しつつ詠われているだろう。恋歌はこの時期を境として次第に遠のいていく。龍介との恋がようやく成就して、その必要がなくなったか

らにほかならない。

百首は恋の歌ばかりで占められているのではない。

ほの青く雪ぞふりぬる如月の風邪のこゝちの窓の
ガラス戸

七年を住みなれたれば煤煙にうすよごれたる白梅
もよし

陀羅尼品呪文の如く口ずさむあまり淋しき夕ぐれ
の空

御経を枕にしきていねにけり常にもまして淋しき
夜ゆゑ

物売の声にまじりてざわ／＼とかはたれ時の町の
さざめき

美しう靄の包みてかへるさの我影ながらなつかし
かりき

掲げればきりもないが、こうした白蓮らしさのよく表れた、ふつくらと抒情的であり、落ち着いた歌も多くみられる。恋の成就を請い願いながらも、百首に底流する打ち消し難い「さびしさ」はどこからくるのだ

ろう。百首の内包するものは複雑で魅力的である。

六

やがて、伊藤家から起こされた香織の認知裁判が持ち上がり、白蓮は東京本郷元町の中野氏本邸に寄寓することになったが、そこで関東震災に遭遇したのである（大12年9月1日）。寄寓した中野邸が焼失し、急遽駒込の松平頼寿伯爵邸に避難したところ、柳原家からは安否の確認さえなく、宮崎家からは握り飯と着替えを持って見舞いの使者が駆けつけてきた。これによつて白蓮も香織も宮崎家に入り龍介や義母槌子、その家族と共に新生活をはじめることになったのである。歌集『紫の梅』所収「大禍日」おほまがひには大震災を次のように詠っている。

〇ゆりかへしまたゆりかへす地ひゞきに競々として夜もいねられず
はらからはわが名を呼ばず火に追はれ二日三みよ
さを野にふせる日も
いたづらに火焰の方をながめつ、知れるかぎり

のいのちかぞへぬ
針一本糸一尺ももたぬ身のいのちひとつを獲て
かへり来し

雨降れば今宵焼野にすてられしなき魂まよふ声
かとぞおもふ

大震災は相模トラフ沿いの断層を震源とするマグニチュード7・9の強震であった。死者・行方不明者ともに10万5千人余という。右五首を含む一連二八首は突然の怖ろしい事態に遭遇しながら現実を直視し、助かった自分自身や周囲の人々の命を愛おしみ、失われた多くの命に対して抱く慰藉の念を受け取ることができる。『踏絵』以来大方は境遇や運命、女であることを怨み嘆くという自己閉鎖的な発想に占められていたが、ここには明らかに歌の詠風、内容の変化が認められるのである。以後写生的、客観的な姿勢は白蓮独自の抒情性とともに様々な対象に向けられて、次のような自然詠、日常詠、家族詠、羈旅歌などに説得力をもった歌境を開拓していく。

天上も地上のごときたゝかひのありやあまたの星
みだれとぶ

思ひきや月も流転のかげぞかしわがこしかたに何
をなげかむ

ひる寝よりさめし吾が児の呼ぶ声に見れば初めて
座りてゐたり

嵐なきて照り渡りたる日のかげの木々の雫に光る
涼け(し)さ

秋の風こよひの細き月かげもうれひとならで君に
吹けかし

いづことも月の姿は見えなくにあかるくなれり庭
一面に

もしやまだ帰る吾子かと脱ぎすてのほころびなほ
す心うつろに

かへり来ぬ人に用なき角帽は塵にまみれてなほ釘
にあり

(二首子息香織の戦死に)
巡礼の心してゆく旅なれば北のはてにもわがゆく
ものか

(『紫の梅』『流転』『地平線』より)

以上、柳原白蓮にとって恋及び恋歌はどのような存在だったのかを考えてきた。つまり、歌を作ることそのものが日々を生きる支えであり、恋をすることも恋歌もそれに等しかった。また、歌の完成度や歌に注ぐ熱意は、相手があるなしに関わらず読み手に与える印象に落差は認められなかったのである。問題が残るとすれば、作品として読み手をどこまで説得させているか、であろう。

今一つの疑問は、既に収録された歌が数カ所にわたって配置されている点である。一例を示せば、一のAに掲げた五首は「心の花」第十四巻第八号所収であるが、最初の四首と最後の一首は分散されて『踏絵』に収録されている。同じくB四首の内三首は順序を変えて配置され、四首目は採録なし。また、一で述べた「初夏や白百合の香に抱かれてぬると思ひき若草の床」は前述の通り、白蓮が伊藤伝右衛門と再婚する直前、松根東洋城に送った色紙の歌であったが、『幻の華』の歌群に入っており、時期的に一致しない。といった具合である。こうした例は他にも多く見られる。これは何を意図したものか。次の機会に考えたい。

〔註〕

- 1 中西洋子著『流転の月——柳原白蓮ノート』角川書店 二〇二三年5月25日P 42～P 45
- 2 石川桂郎『俳人風狂列伝』『葉鶏頭——松根東洋城』中央公論新社 二〇一七年11月25日
- 3 渡邊弧鷲『松根東洋城と連句』『会報 連句』日本連句協会発行 二〇一九年8月1日 提供 中西静子氏
- 4 中川越「文豪たちの良く効く励ましの手紙」『NHK ラジオ深夜便』河出書房新社 二〇二〇年12月20日資料協力 山西正子氏
- 5 註3 参照
- 6 柳原白蓮の清水谷房子宛書簡『近代の女性文学たち… 鎬を削る自己実現の苦闘』第2期「文学者の手紙」5 博文館新社 二〇〇八年4月1日 白蓮担当の阿木津英氏による註記
- 7 註6 阿木津英註記参照
- 8 註1 中西著に引用P 92～P 103
- 9 林真理子『白蓮れんれん』中央公論新社 一九九八年10月18日
- 10 中西著参照P 32～P 33

11 井上洋子「書誌『エニグマ』発行の経緯と『総目次』—付・久保猪之吉略年譜、『エニグマ』人名録」(文学批評『叙説Ⅱ』06) 叙説舎編花書院二〇〇三年8月

12 『几帳のかけ』初版本所収 玄文社一九一九(大8)年3月13日

13 『指鬘外道』黎明会機関誌「解放」一九一八年12月号 大鑑閣一九二〇年3月 中西著P 136～P 143

※ 本稿は全般にわたって註1に示した中西著をベースにしている。ご参照いただければ幸いです。